

社団法人日本写真家協会企画展

日本の光景

The spectacles of Japan



2003年3月13日(木)~23日(日) 月曜休館
東京都写真美術館 2F展示室

秋山忠右・浅井秀美・伊藤勝敏・今森光彦・大久保利克・金瀬胖・神山洋一・川口敏彦・久保敬親・栗林慧・小池汪・小杉和弘
小橋川共男・鈴木幸・菅洋志・杉山晃造・高橋淵明・高橋毅・竹内敏信・中村征夫・並河萬里・芳賀日出男・橋口謙二・橋本紘二
原芳市・長谷川健郎・濱岡収・広河隆一・本田祐造・福島雅光・毛利壽夫・松本コウシ・南良和・和田光弘・渡邊久男・渡部佳則

会期：平成15年3月13日(木)~23日(日) 月曜日休館 午前10時~午後6時(木・金は午後8時まで) 入館は閉館の30分前まで
入場料：一般・学生500円

(20名以上の団体および三越カード、アトレカード、写真美術館友の会会員は400円) 小中高生以下は無料。第3水曜日は65歳以上の方は無料。身体に障害をお持ちの方とその介護者1名は無料。

主催：社団法人日本写真家協会 共催：東京都写真美術館 協力：富士写真フイルム株式会社



橋口 謙二 「子供たちの時間」

社団法人日本写真家協会企画展

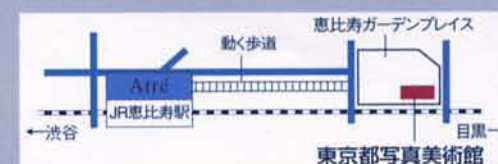
日本の光景

The spectacles of Japan

日本という国を思い描いた時、脳裏に浮かぶ光景は何か。世代や生活環境によって異なるとはいえ、それは決して明るく光り輝くものではないだろう。いま日本は、各分野とも元気がない。市街地は全国どこも機能的に整備されて近代的な景観を誇っているが、相次ぐ工場の海外移転で生産拠点を失いつつあり、農村は、押寄せ安輸入農産物との間に疲れ、また、連日報じられる凶悪事件やスキヤンダラスな出来事は、社会に深刻な病理現象が進行していることをうかがわせる。加えて、アジアと世界の情勢はその問題解決いかんによって日本は大きな影響を受けることになる。明日の日本はどうなるのだろうか。写真家の仕事は、現場で撮影活動を果敢に展開させて映像を切り取り、写真によるメッセージを社会に向けて発信させることにある。対象となった事物や事柄の本質を劇的に伝え、撮影者の意思を明確に表わすこうした写真の力は、見るものに感動を与え、ときには感情を刺激して社会との関わりを喚起させる重要な手がかりとなる。写真家はこのような写真が持つ力を再認識し、こうした時代にこそ社会的役割を果たしてしっかり仕事をしなければならない。この写真展はそんな思いで企画された。展示する作品は協会員36名による155点、野生動物と大自然の神秘、人間的ぬくもりがある生活空間、逞しく生き抜く人々の肖像、それに反し開発による環境破壊、暮らしを脅かす汚染の実態、都市に蔓延する深刻な病理現象など、内容は多岐にわたる。



原 芳市 「ザ・ストリッパー」



お問い合わせ：東京都写真美術館 (恵比寿ガーデンプレイス内)
TEL:03-3280-0099 URL: <http://www.tokyo-photo-museum.or.jp>



久保 敬親 「残された聖域 エゾヒグマ」



金瀬 胖 「ZONE/開発残景」



菅 洋志 「こどもたちのいま」



秋山 忠右 「farmer」



長谷川 健郎 「病人だニッポン」